

宮沢賢治の「舞い」と、異空間からの「帰還」 —「空想傾向」を背景として—

大 島 丈 志

(文教大学)

宮沢賢治作品では異世界が現実世界に非常に近い所にある。その背景には作家の「空想傾向」の資質があると考えられる。作品では異世界に入ることによって主体性に変容がおこり、「異世界」の変容の機序には「匂い」が深く関わると考えられる。そして「異世界」と現実世界との往還を冷徹に見つめる「詩人の眼」があり「異世界」と現実世界の往還をある程度、統制し得ていると考えられるのである。

キーワード：宮沢賢治, 異世界, 空想傾向, 嗅覚

はじめに

宮沢賢治作品は、現実世界と「異世界」が非常に身近なところにある。そしてしばしば現実世界から「異世界」に入り、そして現実世界に帰還する構造が描かれる(1)。その様相は様々だが、その機序(仕組み)は興味深い。「異世界」が現実世界のすぐそばにあるという世界観は、作家宮沢賢治の「空想傾向」(「空想傾性」)の観点から説明をすることが可能ではないだろうか。

松岡和生によれば「空想傾向」(Fantasy proneness)とは、1983年ウィルソンとバーバーによって記載された概念で、「時間の多くを自分で作り上げた世界、すなわちイメージと想像と空想の世界の中で生きる」少数グループの人達の特徴であり、「高感度の催眠感受性を有している」「空想や想像へ長時間深く没入する傾向がある」「幻覚的な(現実と匹敵する)鮮明さでイメージを体験する能力がある」などの特徴を持つ。また、極めて高い他者への共感性も認められる(2)。

従来、宮沢賢治の異世界体験を説明する際には、「アニミズム」「入眠時幻覚」「テレパシー」「解離」など様々な用語があてはめられてきた(3)。報告者は「空想傾向」を背景として宮沢賢治作品の「異世界」を考察したい。

「空想傾向」の特徴は、宮沢賢治が1912年11月、盛岡中学4年の際に、佐々木電眼の「静座法」の指導を受け、催眠状態になったという「高感度の催眠感受性」からもうかがえる。

教え子の照井謹二郎に語った、死去した妹とし子に関する記述も同様である。「この間いつものように一心にお経を読んでから休むと、枕辺にとし子の姿がありありと現れたので、すぐ起きてまたお経を上げていると見えなくなった。」「次の晩もやはり姿が見え、二晩だけであとは見えなかった。人間というものには人によるかも知れないが、死んでからまた別の姿になってどこかに生を受けるものらしい(4)」という夢も、とし子の姿が「ありあり」と浮んでおり、「空想傾向」の「幻覚的な(現実と匹敵する)鮮明さでイメージを体験する能力がある」と一致する。

宮沢賢治の「空想傾向」は、作品において「異世界」を近く(身体的にも精神的にも)描く要因の一つと考えられる。このことは『注文の多い料理店』広告チラシなどからもうかがえよう。そこには「たしかにこの通りその時心象の中に現はれたものである」とある。詩人がまさに経験したものが描かれる傾向にありそれは万人に共通するはずという思いがある。

さらに晩年のメモからは「異空間の实在 天と餓鬼、／幻想及夢と实在」とあり異空間の实在を証明しようとしたことがうかがえる。また「異世界—異構成物—異単元—真空—電子—原子—分子—世界／生物／我」といった世界観も提示している。

このメモ書きからも現実の世界の近くに「異世界」があるという世界観が示されている。

まず「異世界」における登場人物の動きを「舞い」をキーワードに考えたい。

次に作品内における現実世界から「異世界」への移行と「異世界」からの帰還の機序について考えたい。現実世界への帰還の際には、「チュウリップの幻術」のように鋭利なものによる痛みを伴うもの、「鹿踊り

*なお、本報告に関しては内容の一部を文教大学『言語と文化』第32号(2020年3月)に発表しており、内容の一部重複がある。

のはじまり」のように異世界の生物との齟齬が発生するもの、「山男の四月」のように恐怖を伴うもの、など様々な現象が見られる。本報告は特徴的な「匂い」の存在に注目したい。

本報告では、「空想傾向」を背景とし、「舞い」と「匂い」をキーワードにして作品を考察していく。なお宮沢賢治作品の引用は『新校本宮沢賢治全集』筑摩書房より行う。

1. 「異世界」と舞い

花巻農学校時代の教え子の証言では、作家宮沢賢治は、道を歩いている途中、突然踊りだす（そしてまた歩き始める）ことがあったとされる。これは仏教的な「法悦」としても解釈できるが、宮沢賢治の資質である「空想傾向」と関わるのではないか。花巻農学校の同僚、白藤慈秀は次のように述べている。

麦の穂はよく実って、そよ吹く風に手招きするかのように柔かに揺れている。

皓々たる月は大空にかかっている。

この風景を見た宮沢さんは、何を思い出したのか、突然両手を高くあげ、脱兎の勢いで麦畑の中に入っていった。手を左右に振り、手を高くまた低く、向うに行ったと思うと、すぐ引き返してきた。こうしたことを数回くり返してもとの場所に戻って路上の草の上に腰をおろし、大きな溜息をしていた。

私は奇異に思い「いま何をしたのですか」と聞きただすと、宮沢さんは平気で、「銀の波を泳いで来ました」といった。

その晩は樹にも石にも黒い影をおとしているほど月の光は皓々としてかがやいていた。宮沢さんは、レコードの音律と月の光りに誘われて全身躍動し、大空にむかって両手を羽ばたき躍動し、狂踏、乱舞、ただ踊り四肢高く舞うなど、寄宿舎の生徒がこの状を見て全く不思議であったと私に話してくれた。

後日、宮沢さんに、宿直の晩のできごとについて糺すと、あれは、あまりに月がよかったので、その光に誘われ、無茶苦茶におどったのです。それは踊りの練習でもなく、ただ詩を作るときはどうしても身体にリズムの感覚が必要なので、身体にその訓練をつけるためであった。(5)

風景への没入は「空想傾向」と解釈することができるのではないか。同時に詩人としての訓練、「身体知」

(コツや感などの身体に根差したもの)でもあり、この「舞い」に「空想傾向」と詩人の訓練の二重性があることが分かる。次に短編の「花椰菜」を見ていきたい。

私はもういつか小屋を出てみた。全く小屋はいつかなくなってみた。うすあかりが青くけむり東のそらには日本の春の夕方のやうに鼠色の重い雲が一杯に重なって来た。そこに紫苑の花びらが羽虫のやうにむらがり飛びかすかに光って渦を巻いた。

みんなはだれもパツと顔をほてらせてあつまり手を斜に東の空へのぼして

「ホッホッホッホッ。」と叫んで飛びあがった。私は花椰菜の中ですばだかになってみた。私のからだは貝殻よりも白く光って来た。私は感激してみんなのところへ走って行った。

そしてはねあがって手をのぼしてみんなと一語に

「ホッホッホッホッ」と叫んだ。

たしかに紫苑のはなびらは生きて来た。

みんなはだんだん東の方へうつつって行った。

それから私は黒い針葉樹の列をくぐって外に出た。

この作品に描かれるのは植物・自然界との合一体験といえる。紫苑や花椰菜への没入体験は「空想傾向」とも重なるのではないだろうか。同時に、「針葉樹」という尖ったものの介入によって「異世界」から帰還する点、尖ったもののような痛みを伴うものが帰還の機序の一つになること特徴的だといえる。

次に考えたいのは「真空溶媒」(Eine Phantasie im Morgen)である。

融銅はまだ眩めかず

白いハロウも燃えたはず

地平線ばかり明るくなつたり陰つたり

はんぶん溶けたり澱んだり

しきりにさつきからゆれてゐる

おれは新らしく [て] パリパリの

銀杏なみきをくぐつてゆく

その一本の水平なえだに

りつばな硝子のわかものが

もうたいい三角にかはつて

そらをすきとほし [て] ぶらさがつてゐる

けれどもこれはもちろん

そんなにふしぎなこと [で] もない

おれはやつぱり口笛をふいて

大またにあるいてゆくだけだ
 いてふの葉ならみんな青い
 冴えかへつてふるえてゐる
 いまやそこらは alcohol 瓶のなかのけしき
 白い輝〔雲〕のあちこちが切れて
 あの永久の海着がのぞきでてある
 それから新鮮なそらの海鼠の匂
 ところがおれはあんまりステツキをふりすぎた
 こんなにはかに木がなくなつて
 眩しい芝生がいつぱいいつぱいにひらけるのは
 さうとも 銀杏並樹なら
 もう二哩もうしろになり
 野の緑青の縞のなかで
 あさの練兵をやつてゐる
 (中略)

すつととられて消え〔て〕しまふ
 それどこでない おれのステツキは
 いつたどこへ行つたのだ
 上着もいつかなくなつてゐる
 チョツキはたつたいま消えて行つた
 恐るべくかなしむべき真空溶媒は
 こんどはおれに働きだした
 まるで熊の胃袋のなかだ
 それでもどうせ質量不変の定律だから
 べつにどうにもなつてゐない
 といつたところでおれといふ
 この明らかな牧師の意識から
 ぐんぐんものが消えて行くとは情ない
 (中略)

(大きなもんですな)
 (これは北極犬です)
 (馬の代りには使へないんですか)
 (使へますとも どうです
 お召しなさいませんか)
 (どうもありがたう
 そんなら拝借しますかな)
 (さあどうぞ)

おれはたしかに
 その北極犬のせなかにまたがり
 犬神のやうに東へ歩き出す
 まばゆい緑のしばくさだ
 おれたちの影は青い沙漠旅行
 そしてそこはさつきの銀杏の並樹
 こんな華奢な水平な枝に
 硝子のりつばなわかものが
 すつかり三角にな〔つ〕てぶらさがる

界」に入る詩である。ただし、「異世界」に入った「おれ」は詩の後半で再度また別の場所へ「犬神のやうに東へ歩き出す」のが特徴的である。

この詩では、「新鮮なそらの海鼠の匂」がきっかけとなり「異世界」に入っていくのであり、「匂い」が「異世界」への入り口となっていることがわかる。またステッキを何度も振るという行為（これも広義の「舞い」）によっても異世界に入っていくことがわかる。単に「匂い」のみではなく二重性があることがわかる。

さらには「苦扁桃の匂」がきっかけで「すっかり荒んだひるま」になり、異世界がまた「沙漠旅行」へと別の展開をしていく。この詩では「匂い」が世界から世界への移動の切り替えに深くかかわっていることがわかる。

この「真空溶媒」についての先行研究の主なものをまとめる。

杉浦静は「『真空溶媒』——〈物質の不滅〉と死と再生」において、片山正夫『化学本論』の「一つの物体系が如何なる科学的变化を受くるも、原物質の総質量と生成物体の総質量とは相等し。」を引用し、「質量不変の定律」、つまり、「すべての物質を溶解させるような溶媒を想定するならば理屈の上では可能になる」と説明する。(6)

天沢退二郎は「『真空溶媒』論序説」の中で、「要するに、「おれ」は銀杏並樹の「硝子のわかもの」の下から、じつは一步も歩き出しはしなかったのであり、「さつきの」とこんどのと、二つの銀杏並樹には含まれた何マイルかの行程がすなわちファンタジーだったというのであろう」(7)とまめる。

萩原昌好は『『春と修羅』を読む—その構成と主題について』において、「長い詩なので、かなりの時間がかかった、と思わせるのだが、実は空間的にはほとんど動いてはいないのだ。つまりこの詩の時間も殆ど瞬間と言ってもよい位のものかも知れない短時間の幻想」(8)とする。

松田司郎は『『真空溶媒』—自己消滅のキネオラマ—』において、「しかしながら、詩人のモチーフは信仰を説くことにあるのではない。むしろ、体験そのものの新鮮さ、驚愕、陶醉、神秘的戦慄こそが、この幻想を詩歌として結実させたのにちがいない」「この作品には、全体を通して、溶け込むこと、揺れること、浮かぶことの身体感覚が、不思議な快感を伴ってじかに伝わってくる」「自我を離れて、徹底的に自己消滅を果たすと、なんと気持ちのよいのびのびとした安らぎを味わうことか。」(9)と述べている。松田論は体験そのものの新鮮さを映していると述べており、首肯できる。

ある朝の現実世界を散歩している情景から「異世

自身の持ち物がなくなり裸になる点は、前述の「花椰菜」にある没入体験（合一体験）と類似する。ただし、「真空溶媒」では現実・異世界・別の異空間・帰還の順を辿る点で、「おれ」が異世界に行って帰らない可能性も読み込める点が興味深い。また、「おれ」は「異世界」を体験することで変容して帰還したと考えられる。

杉浦静は前掲の論文において「ここでの〈Phantasie=ファンタジー〉は「夢想」「幻想」を表すのではなく、「そこでは、あらゆる事が可能である」（『注文の多い料理店』広告ちらし）物語形式という意味と理解してよいのではないだろうか。」(10)と述べている。

杉浦論では、あくまで物語形式の一つとして書かれたものであることになり、この読みは可能である。この読みの場合、「真空溶媒」の「異世界は」あくまで物語形式の一つとして客観的になる。

ただし前述してきたように、詩人が自らの「空想傾向」を科学的に説明しようとした詩とも考えることができるのではないか。

詩人としてある物語の形式をとったということ、自身が実際に体験した「異世界」を科学的にスケッチしようとするこの二重性があると考えられる。

2-1. 「異世界」と「匂い」

宮沢賢治作品に関して、作家宮沢賢治の「空想傾向」(Fantasy Proneness)を背景に置きながら、作品中の「異世界」の描かれ方と「匂い」の関係性を考えていく。本報告で注目したいのは、現実世界への帰還の際の特徴的な「匂い」である。宮沢賢治作品における「匂い」が特徴的であることは、特に「銀河鉄道の夜」における「幻嗅」について先行研究において考察されている(11)。ただし先行研究では「匂い」に関する考察は「銀河鉄道の夜」に限られたものであることから、さらなる考察の必要性があろう。

「匂い」は、「知らず知らずのうちに記憶や情動や感情を制御してしまう」ものであり、目で見たり耳で聞いたりしたものとは比して「嗅覚感覚を通じた記憶の呼び覚ましは、より正確で迅速なのである。」(12)とされる。

宮沢賢治作品においては、月のあかりを「匂い」で表現するなど、色や光を「匂い」に置換して表現する「共感覚」ともみられる表現が多く描かれる。

次に『春と修羅』第一集「青森挽歌」の部分抜粋する。

巻積雲のはらわたまで
月のあかりはしみわたり

それはあやしい蛍光板になつて
いよいよあやしい苹果の匂を発散し

『春と修羅』第一集の「無声慟哭」では、病床の匂いを気にするトシ子に、詩人は以下のように述べる。部分を抜粋する。

かへつてここはなつのはらの
ちいさな白い花の匂いでいつばいだから

この部分では、とし子の来世が「匂い」の良いものであることが示される。

『春と修羅』第一集「青森挽歌」では良い「匂い」と悪い「匂い」が存在している。該当部分抜粋する。

つぎのせかいへつゞくため
明るいいゝ匂のするものだったことを
どんなにねがふかわからない

この詩では、良い匂いがより良い次の世界に続くものとして捉えられる。ただし、この詩には悪い匂いも存在している。「亜硫酸や笑気のにほひ」という記述もあり、暗く悪い世界を暗示している。

仏教的に考えれば、悪い匂いは人間界から下降する方向であり、良い匂いは上昇する方向である。宮沢賢治が読んだ『漢和對照妙法蓮華經』においても、この経を享受する者は、「三千大千世界の、上下、内外の種種の諸の香を聞がん」(13)。として、すべての世界の香りを認知できるようになる、という記述がある。

以上より、賢治作品においては「共感覚」とも、仏教的来世観とも解釈できる「匂い」の表現があり、さらに「異世界」と匂いとの関係は、詩人、もしくは登場人物が読み解けようが読み解けまいが、何らかのメッセージを持っているということが出来るだろう。

2-2. 異世界からのメッセージとしての「くろもじ」

では、「異世界」からの離脱の際に起こる「匂い」にさらに注目して、現実世界への帰還の機序について考察を進める。

異世界から現実世界に帰還する「機序」に関して、特に匂いに関係のある「なめとこ山の熊」「税務署長の冒険」の二作品を挙げる。

「なめとこ山の熊」(一九二七年頃の執筆と推定)においては、小十郎が熊の親子の熊の会話を聞いてしまうシーンがある。

「おかあさまはわかったよ、あれねえ、ひきざく

らの花。」「なあんだ、ひきざくらの花だい。僕知ってるよ。」「いゝえ、お前まだ見たことありません。」「知ってるよ、僕この前とって来たもの。」「いゝえあれひきざくらではありません、お前とって来たのきさゞげの花でせう。」「さうだろうか。」「子熊はとぼけ〔た〕やうに答へました。小十郎はなぜかもう胸がいっぱいになってもう一ぺん向ふの谷の白雪のやうな花と余念なく月光をあびて立ってゐる母子の熊をちらっと見てそれから音をたてないやうにこっそりこっそり戻りはじめた。風があっちへ行くな行くなと思ひながらそろそろと小十郎は後退りした。くろもぢの木が月のあかりといっしょにすうっとさした。

「くろもじ」は良い匂いのする樹木であり、これは、小十郎が良い日常とは異なる世界にいたことを示す根拠となろう。この体験の後、小十郎はより熊の世界に接近していくこととなり「異世界」に参入した体験によって小十郎の主体自体に変容があった。そのきっかけに「くろもじ」の匂いも関係しているのではないか。次に「〔税務署長の冒険〕」の終結部を示す。

「お変りなくて結構です。いや本署でも大へん心配いたしました。おい。みんな外へ引っぱれ。」
 そしてもうぞろぞろみんなはイーハトヴ密造会社の工場を出たのだ。五分のちこの変な行列があの番所の少し向ふを通つてゐた。
 署長は名〔誉〕村長とならんで歩いてゐた。「今日は何日だ。」署長はふつとうしろを向いてシラトリ属にきいた。「五日です。」「あゝもうあの日から四日たつてゐるなあ。ちょっとの間に木の芽が大きくなった。」「署長はそらを見あげた。春らしいしめった白い雲が丘の山からぼおつと出てくろもじのほびが風にふうつと漂つて来た。
 「あゝいゝ匂だな。」署長が云つた。
 「いゝ匂ですな。」名〔誉〕村長が云つた。

「匂い」を媒介して、村長と署長が、結びついている。ここでくろもじの匂いは、名誉村長と中央出身の税務署長を結びつける役割を果たしている。「匂い」を媒介として中央出身の署長の心象が村長との共通項を持つこと、署長の内面の変更、変容も感じられるであろう。

2-3. 詩人の目

「異生界」からの帰還の際、宮沢賢治作品において

は、たとえ登場人物が認知できようがしまいが、理解できようがしまいが「匂い」が流れてくることによって、「異世界」へ入り、帰還する機序が、作られていると考えられる。それは「共感覚」とも「空想傾向」とも理解することもできる。

「なめとこ山の熊」にしても、「税務署長の冒険」にしても、「異世界」からの帰還に「匂い」が配置されている。では、また、多くの作品で現実世界から「異世界」に入りまた現実世界に帰還している。

この機序の軸として、世界を冷徹に見つめる「詩人の目」が存在するのではないか(14)。

柴山雅俊は宮沢賢治作品には、体外離脱体験や離人症的症状、表象幻視、幻視など多くの解離の兆候を読み取ることが出来るとしながらも、宮沢賢治には明かな病的要素はみられないとし、さらになぜ兆候がありながらも精神的に不安定にならなかったのかについては、「周囲の人に恵まれていたこと、知能や創造性に溢れていたこと、強い意志を持っていたことなどが関係していたであろう」(15)と述べる。その上で、「青森挽歌」の詩句を引用しながら、「時間的にも空間的にも広大な視点をもつアニミズム、それをありありと体を感じる素質を賢治は持っていたらう」(16)とする。

創造性と強い意志に関しては、次の書簡が残されている。

いろいろな暗い思想を太陽の下でみんな汗といっしょに昇華したそのあとのあんな楽しさはわたくしもまた知つてゐます。われわれは楽しく正しく進まうではありませんか。苦痛を亨(ママ)楽できる人はほんたうの詩人です。もし風や光のなかに自分を忘れ世界がじぶんの庭になり、あるひは惚として銀河系全体をひとりのじぶんだと感ずるときはたのしいことではありませんか。(1925年9月21日 宮沢清六宛封書)

労働と創作が結びついている点は農学校時代の宮沢賢治の傾向を示し興味深い。同時に自分と世界との合一を述べそれを詩人と関連付けている。

この「宇宙」との合一について、宮沢賢治作品の影響も強く受けている谷川俊太郎は朝日新聞の記事「詩はどこへ行ったのか」において以下のように述べている。

人間を宇宙内存在と社会内存在が重なっていると考えると分かりやすい。生まれる時、人は自然の一部。宇宙内存在として生まれてきます。成長するにつれ、ことばを獲得し、教育を受け、社会内

存在として生きていかざるをえない。散文は、その社会内存在の範囲内で機能するのに対し、詩は、宇宙内存在としてのあり方に触れようとする。言語に被われる以前の存在そのものをとらえようとするんです (17)

ここには、詩人として、社会内存在を離れ本来的な宇宙内存在に触れる必要性が述べられている。

宇宙内存在に触れようとする詩人の試みについては、宮沢賢治は次のように述べている。

○「詩法メモ」

詩は裸身にて理論の至り得ぬ
 堺を探り来る
 そのこと決死のわざなり

現実世界のみではなく、「異世界」の中に入ろうとし、それに触れ、世界が自分の「庭」となる感覚は、「異世界」を観察し、操作しようとする、「詩人の目」であるといえよう。

おわりに

宮沢賢治作品では「異世界」が現実世界に非常に近い所にある。その背景には作家の「空想傾向」の資質があると考えられる。作品では異世界に入ることによって主体性に変容がおこり、「異世界」の変容の機序には「匂い」が深く関わると考えられる。そして「異世界」と現実世界との往還を冷徹に見つめる「詩人の眼」があり、「異世界」と現実世界の往還をある程度、統制し得ていると考えられるのである。

注

- (1) 本報告で扱う「異世界」は、日常・自己に対して非日常・他者としての存在。日常・自己と非日常・他者との境界領域で物語が発生するのが宮沢賢治作品の特徴でもある。仏教の教理にある「十界」(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏)も異世界観に深くかかわるが、本報告では作品から考察可能な作家の資質と異世界の描かれ方に重点を置く。
- (2) 松岡和生「空想傾性 (Fantasy Proneness) のポジティブ機能」『現代のエスプリ』512号, 至文堂, 2010年3月 参照)
- (3) 「独特のテレパシー」松田司郎『国文学 解釈と鑑賞』第65巻2号, 至文堂, 2000年2月, 116頁・「アニミズム」柴山雅俊『解離性障害』筑摩書房, 2007年9月, 187頁など
- (4) 佐藤隆房『宮沢賢治—素顔のわが友 最新版』富山房, 2012年3月, 112頁
- (5) 白藤慈秀『こぼれ話宮沢賢治』杜陵書院, 1972年3月, 60～63頁
- (6) 『国文学 解釈と鑑賞』第74巻6号, 至文堂, 2009年6月, 54頁
- (7) 『国文学 解釈と鑑賞』第68巻9号, 至文堂, 2003年9月, 98頁
- (8) 注6同誌, 38頁
- (9) 『国文学 解釈と鑑賞』第65巻2号, 至文堂, 2000年2月, 115～116頁
- (10) 注6同論51頁
- (11) 石井竹夫「宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する幻の匂い」(前編・後編) (『人間・植物関係学会雑誌』vol.12. No.2 人間・植物関係学会, 2013年3月)
- (12) 東原和成「生物がにおいを識別する仕組み」『化学と生物』vol.41.No.3 公益社団法人 日本農芸化学会, 2003年3月, 153頁)
- (13) 島地大等「法師功德品第一九」(『漢和對照妙法蓮華經』明治書院, 大正九年六月(一七版), 472頁)
- (14) 目に関しては様々な論がある。例えば押野武志は「このような視線の分裂が詩を成立させる」と述べる。(『宮沢賢治の〈眼〉について』『宮沢賢治研究 Annual』Vol.6, 宮沢賢治学会イーハトーブセンター, 1996年3月, 246頁)
- (15) 柴山雅俊『解離性障害——「うしろに誰がいる」の精神病理』筑摩書房, 2007年9月, 186頁
- (16) 注15同書, 187頁
- (17) 『朝日新聞』朝日新聞社, 2009年11月25日, 朝刊, 19面